

事例から見た適応指導教室の分析

本 間 友 巳

(京都教育大学)

The Analysis of Alternative Classrooms for School Refusal Students from the Viewpoint of Case Study

Tomomi HONMA

2000年11月30日受理

抄録： 増加する不登校児童生徒への有力な援助の方法である適応指導教室の原理や条件に関して、2事例を通して検討を加えた。その結果、居場所づくりのための条件として、「安全（安心）」と「自由」の保証、「個別援助」の重視、子どもの「自己決定」の尊重、「試行錯誤」の承認、「自発的な子ども集団」の形成、これら5条件を導くことができた。

キーワード：不登校、事例、適応指導教室、居場所づくり

I. はじめに

児童生徒数の減少に関わらず、不登校児童生徒数は増加の一途を辿っている。平成10年度に不登校を理由に年間30日以上学校を欠席した小学生は26,017人、中学生は101,675人で、前年度に比べ、小学生25.3%、中学生20.0%の増加となっている（総務庁青少年対策部,2000）。

不登校の増加に対して、こころの教育の推進、教員研修、「スクールカウンセラー」や「こころの教室相談員」の配置をはじめとする様々な施策が講じられてきた。これらの取り組みの中で、学校外に不登校児童生徒の居場所を作る試みである適応指導教室の設置も、全国の地方自治体で精力的に行われてきた。平成2年度（1990）に全国で84教室であった適応指導教室は、平成8年度（1996）には698教室に急増している（総務庁行政監察局,1999）。この増加の一因は、平成4年（1992）以降、適応指導教室への通室が「出席扱い」と認められたこともあるが、実証的な研究によって、適応指導教室での援助の効果が検証されつつあることがあげられる。

例えば、本間・中川（1997）は、適応指導教室に通室した経験のある不登校児童生徒の追跡調査を実施し、予後が良好な者が約70%であることを明らかにした。また、予後良好を規定する最大の要因が現在の友人との適応的な関係であり、この友人適応にもっとも影響を与えているのが、適応指導教室での活動経験であることを実証した。また、下山・須々木（1999）は、ある適応指導教室で通室前には全体の89%が在籍校との関わりを持てなかったが、通室してからは72%が在籍校と関わるようになったと述べている。このように、適応指導教室の成果に関して実証的なデータが蓄積されてきている。

そこで、ここで述べたような成果を生み出している適応指導教室を支える条件について考えてみたい。とりわけ、どのような条件が存在するときに適応指導教室が子どもたちの居場所となり、上述したような成果を産出するのか、具体的な成果を支える基盤について考察してみたい。

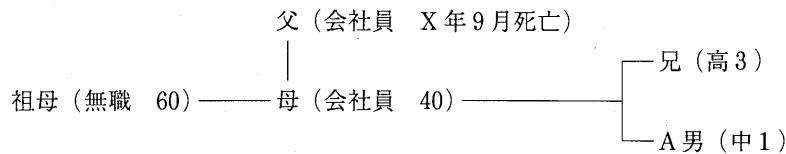
本研究では、筆者自身の適応指導教室でのカウンセラー経験をもとに、具体的な事例を通して、適応指導教室の居場所としての条件を考察することを目的とする。事例を取り上げて考察する理由は、実証的な成果を支える条件を考えるとときに、実際の事例を具体的に辿っていくことが、豊かなそして生きた考察の手がかりを提供するからである。

以下に、比較的典型的な展開を示した2事例を取り上げ経過を記述する中で、適応指導教室を意味ある場にするための条件について考えていきたい。（なお、事例はプライバシーを保護するために、本質を損なわない配慮をしつつも大幅に改変した。〈 〉はカウンセラー（Th）の発言を表している）

II. 事例

1. 事例1：A男（中1男子）

- (1) 主訴 不登校。緊張や不安が強く、学校に行けない
- (2) 家族構成（X年度11月段階）



〈父〉9月に事故で急死。最近の父親にはめずらしく恐い父親。2人の子どもを厳しく育ててきた。しかし、子どもと釣りに行くなど、子煩悩な父親でもあった。がっちりした体格で、見かけは恐い印象を与えるが、まじめで神経質な面をもっていた。

〈母〉夫と同様まじめな人。2才で父親に死なれ、母親の実家で育った。いつも甘えやわがママを抑えて、遠慮しながら過ごしてきたという。結婚後は、夫に従いながら、会社の事務員として忙しい日々を送ってきた。夫の死後、子どもたちの問題で「自分が悲しんでいる場合でなかった」と語る。

〈兄〉A男以上に父親に厳しく育てられた。大変まじめで、同世代の子どもたちとうまくつき合えない。父の死後混乱し不登校。妄想も出現し精神科に通院。薬の作用で寝てばかりいるようになり、心配になって断薬。病院を変わり他の医師の指導のもと、最終的に妄想が消失する。釣りが好きでA男と一緒に釣りに行ったりするなど、兄弟関係は良好。

〈祖母〉母の実母。共稼ぎのため、祖母が主に家事をしてきた。まじめな人。神経質な面あり。調子を崩すと不眠になり、医者から処方された薬（抗不安薬）を飲むこともある。

(3) 生育歴・性格

手のかからない子で小学校まで問題なし。中学に入り1学期後半から体調が悪くなる。頭痛・腹痛等、医者にもてらうが異常なし。7月頃学校を飛び出し、しばらくどこかにいた後、家に戻り「なんのために生きているかわからない」と母に訴えたこともある。それでも1学期の欠席は2, 3日だった（しかし、早退が多かった）。

2学期に入り、父親急死。その後A男は混乱する。落ちこんで突然泣きだしたり母と手をつないで寝たりで、最悪の状態が続く。10月になり、病院でカウンセリング（A男は続かず。母のみ1回／2Wで継続）。

性格は、兄ほどの堅物はないが礼儀正しくまじめ。心理的エネルギーは低くないが、神経質な面もあって適切にエネルギーを外界に表現できない。後に実施したバウムをみると、一本の木を通して比較的ストーリー性のある空想が展開されている。やや了解しにくい面があるものの、ストーリーをThに説明できた点を考えると、内向したエネルギーの強さと、そのエネルギーを一応統合している自我の強さや健康さを感じさせる。なお、担任の教師（女性）は親身になってくれる信頼のできる人。学力は中程度。

(4) 来談経路 病院の勧めにより、X年11月、母のみ来室。

(5) 援助の過程

○インテーク（X年11月） 母親面接。

母は、上述したような経過を話す。夫の死、子どもたちの混乱・不登校と悲痛な思いを経験しながらも、必死に家族を支えようとしている母親の姿に、Thは胸を打たれる。なお、A男は来室意欲なし。

Thの考えとして、以下の2点を母に伝える。

- ・母親自身は病院でカウンセリングを継続して受けており、Thとの関係は、A男が適応指導教室に来室するようになるまで、ときどき電話で近況を報告するにとどめる。
- ・担任との関係は良好などで、学校と連絡を取りながら進めていく。

○第1期（X年11月～X+1年8月）

〔母親からの電話による連絡〕

少しずつ元気になってきた。2年生になってからは、少し落ち着いてきた。ファミコンをしたり、マンガを読んだりして1日を過ごしている。勉強することはまったくない。ときどき、兄と釣りに行ったりもする。（なお、兄はなんとか高校を卒業させてもらえた。しかし、釣りにいく以外は弟と一緒に家にいる生活）。

夏休みになり、A男は適応指導教室に行ってみる気になる。

○第2期 (X+1年8月～X+1年12月)

8月中旬, A男ははじめてやってくる。比較的大柄でがっちりした体格(父親似とのこと)。Thの質問にハキハキ答え、素直な印象を受ける。ワープロが気に入ったようで、夏休み明けの9月から適応指導教室に通うことにする。

[適応指導教室での様子から]

9月から通室を開始する。毎日通ってくる。勉強はまったくしない。マンガを描いたり、ワープロやゲームを適応指導教室のスタッフとしたりして過ごす。マンガの内容は、テレビマンガのキャラクターのような人物が2人登場し、一方が他方を徹底的にやっつけるストーリーで、最後はテレビの中の出来事であったという落ちがつく。

「適応指導教室での生活は楽しい」と、A男はThに語る。しかし、家では突然のように落ち込み生活のリズムが崩れ、朝起きられなくなり通室できなくなる(睡眠-覚醒のリズムが狂う感じ)。2週間程来室し、その後1週間ほど休み、再びリズムが回復すると来室する生活を繰り返す。

[母親面接から]

適応指導教室へは喜んで行っている。家に帰るとつまらないようで、ずっと適応指導教室にいたい様子。生活のリズムが崩れやすい。ときどき寝つけなくなるようで、それがきっかけで朝起きられなくなる感じ。

母親自身は、4月以降、病院の面接中断。現在の母親の心の寄りどころは宗教。夫の死後、ある宗教に帰依する。夕食の支度は祖母に任せ、勤務後毎日のように集会場へ出かけている。

兄のことに話が及ぶ。学校にも行けなくなり、80日程休むが、医者への援助と学校側の特別な配慮で卒業は認められる。しかし、その後も家にひきこもる。10月、Thは別の専門機関を紹介し、兄はそこでカウンセリングを受けるようになる。

○第3期 (X+1年12月～X+2年3月)

[適応指導教室での様子から]

相変わらずまったく勉強しないが、生活のリズムは安定し、ほとんど休まず通室するようになる。適応指導教室の同世代の子どもたちとも徐々に親しくなり、センター内で鬼ごっこに興じたりするようになる。適応指導教室が休みの土、日曜日、お互いの家に行き交うようになる。

[母親面接から]

適応指導教室の友だちが新聞配達をしているのを知って、1月から兄と一緒に新聞配達を始める(夕刊80部。なお、兄は朝刊240部と部数が多すぎて続かず)。A男は順調。昼は適応指導教室に通室し夕方は新聞配達をするという、生活のリズムが確立されてきた。

A男は、幼い頃からまったく反抗することのない子だった。小学生の頃は、母は父親の命令でA男に勉強を教えこんできた。A男は嫌がることもなく指導に従ってきた。「そのことが悪かったのでは…」と母は言う。また、母親自身も、甘えやわがままを押えながら生きてきたと言う。反抗することのなかったA男の気持ちがよくわかったと、涙ながらに語る。

○第4期 (X+2年4月～X+2年8月まで)

[適応指導教室での様子から]

3年生になったのを機に、1時間学習するようになる。新しい担任とも気が合ったようで、1年半ぶりに学校に登校した(その後、月1回程度職員室へ登校)。適応指導教室への通室も、新聞配達も順調に進んでいく。

よく夢を見ると、A男はThに言う。頻りにみる夢は、父親に叱られる夢(前年の秋頃から4月頃まで)。「勉強していない!」とか「遊んでばかりいるな!」など、いつも叱られる夢。よく見るので、最近では夢の中で「これは夢だ」とわかることも言う。父の印象は、やさしい面もあったが恐さが圧倒的に強いとのこと。

6月下旬から、学習意欲が低下し休み始める。適応指導教室の通室者が大幅に変わり、気のあう仲間がすべていなくなったこと、さらにこの年の通室者は女子がほとんどで、男子が2、3人しかいないことも、休みだしたことに影響を与えている様子。

しかし、3カ月ぶりに来所したX男と意気投合し、7月中旬からリズムが元に戻り、再び毎日通いだすようになる。

[母親面接から]

5月まで順調。6月後半になりリズムが狂いだす。寝つけず朝起きられない。適応指導教室へ行くのがいやになった訳ではないと母に言う。睡眠-覚醒のリズムが一時崩れた以外、家庭生活に問題はない。学校にも、月1回程度自分の意思で行っている。

むしろ、積極的な一面もみられる。たとえば、6月上旬、適応指導教室のY子から長電話があった。実際はA男の方が声をかけたようで、今までのまじめで堅物のA男からは考えられないこと（しかし、その後Y子からの連絡はなく、つき合いには至らなかった）。

また、中学校の友だちたちとも、ときどき会って遊んでいる。6月下旬になり、友だちから誘われて空手をしたいと言い出す。新聞配達の後、道場へ通うようになる（月謝はA男のバイト代から払う）。〈同世代のいろいろな子どもたちとつき合っていくことが、A男の今の大切な課題。とても良いこと〉と、Thの考えを伝える。

なお、兄の方は3月下旬から新聞配達再開する（夕刊、120部）。昼頃まで寝て活動開始という夕刊の配達に合わせた生活になってしまう。その結果、専門機関でのカウンセリングは中断する。

○第5期（X+2年9月～X+3年3月まで）

[適応指導教室での様子から]

昼は、適応指導教室で友だちやスタッフとの会話や遊びを楽しむ。夕方は新聞配達に精を出す。一時に比べ学習意欲は低下したものの、安定した生活のリズムが確立される。髪型や服装などのおしゃれにも若干の関心が生まれ、思春期の若者らしい雰囲気が現れてくる。「最近は以前のように、叱られる夢をみるものがなくなった」と、Thに語る。

進学は定時制高校をめざし、適応指導教室でも勉強を始める。わからないところは積極的にスタッフに質問するようになり、進学への意欲が高まってくる。3月の受験も無事乗り切り、志望校に合格する。

[母親面接から]

家でもとても安定している。8月末、父の3回忌に親戚が集まった。昨年は中座してしまったが、今年は楽しそうに最後までいた。また、Thから〈B君はとても成長した〉と言われたことを、母に嬉しそうに語ってくれた。空手の道場は家から遠く結局9月でやめてしまうが、家でみる限りとても落ち着いている。

12月頃から、定時制高校へ進学したいという気持ちをはっきり表れてくる。今までまったくしなかった勉強を家で少しずつやり始める。

A男の高校合格を受けて、「不登校になった頃を思い出すと、（この合格は）考えられないこと。本当にここまでよく立ち直った」と、母は涙ながらに述懐する。

その後、定時制高校では、友だちにも恵まれ、順調に4年間過ごし卒業を迎える。卒業後は専門学校へ進学する。

(6) 事例の考察

父親から厳しく育てられた大変まじめで礼儀正しい少年が思春期を迎えたとき、小学校から中学校という集団の質が変化する中で、ある種の辛さを感じ登校をしづらだすことは比較的によくあることと言える。しかしA男の場合、それに加えて強い影響力をもった父の急死という、想像を絶する危機に遭遇する。A男は混乱し、突然泣きだしたり母と手をつないで寝たりと、激しく退行していく。並行して、兄も不安定な状態になり、妄想・幻覚などの精神病様の反応を呈する。この時期は、「兄弟とも混乱し、夫の死を悲しんでいる場合ではなかった」と後に母が述懐するように、残された家族全体が大きく揺れた時期であった。

この混乱期に、カウンセリングを受けていた病院の紹介で母のみが来室する。A男はまだ通室できる状態ではなく、来室意欲の生まれる翌年夏まで電話のみの連絡で見守ることとなる。この期間、母は病院でのカウンセリングやThへの電話相談、また、その後最大の心の支えとなっていく宗教との出会いによって、子どもたちに対して適切な関わりができるようになっていった。そして、このことがA男の来室に結びついたと言えよう。

子どもが家の中に閉じ込もっている時期、子どもに直接関わる保護者が焦らず安定していることは、きわめて大切なことといえよう。そのためには、保護者の不安や焦りを受け入れサポートする人の存在の有無は重要な意味を持つのである。

さて、2年生の2学期以降、A男は適応指導教室に通い始める。最初は、適応指導教室のスタッフやThとの関係の中だけで活動している。しかし、安全や自由を実感するにつれて、徐々に活動範囲を広げていく。通室を

開始して3ヶ月ほど経った頃には、適応指導教室の同世代の友だちとの関係にまで対人関係を拡大していく。その結果、不安定ながらも徐々に元気を回復していく。この時期、小4から中3までの男子の仲間集団が形成されており、その中でA男は、一緒にスポーツやゲームや鬼ごっこをしたりと、楽しく豊かな時を過ごしていく。このことが、A男の深い心の傷を徐々に癒すことにつながっていったと考えられる。

第2期まで休むことの多かったA男は、第3期になりほとんど休まず通所するようになる。友だちの影響もあって、新聞配達を始める。朝から昼にかけて適応指導教室で活動し、夕方は新聞配達に出かける生活が始まる。日々の生活にリズムが生まれ、このことがA男の精神的な安定を促進したことは疑いない。不登校の子どもたちが一端崩れたリズムを再び回復させることは、それほど容易いことではない。家の中だけにおいて、リズムある生活を確立するのは至難と言えよう。適応指導教室という場に通うこと自体が、生活リズムの確立に大きく貢献したのである。

第4期、3年生になったのを機に学習を始める。しかし、卒業や学校復帰で適応指導教室のメンバーが大幅に入れ替わってしまったことに、1年半ぶりに始めた勉強の疲れも加わって、6月後半から7月にかけて休みがちになる。しかし、この退行も一時的なものにとどまり、確実に回復していることを感じさせる。

またこの時期、A男の中に異性への淡い関心が芽生えるなど、徐々に思春期らしい雰囲気生まれてくる。実際に異性とつきあうことはなかったものの、同性とのつきあいから異性への関心という発達的变化それ自体は、A男が健全な発達を遂げている証左と言えよう。

第5期は順調な歩みを続ける。適応指導教室を巣立った後、未知の場で始まる新しい人間関係を切り開いていく力をA男はつけてきた。適応指導教室でのこの1年半が、これからの人生を力強く生きていくうえでの、意味ある準備期間になったのである。

最後に、A男の夢について一言してみたい。A男がよくみる夢は、亡くなった父に関するものであった。夢に登場する父は、叱責する怖い父であった。青年期の多くの子どもたちは、心理的に親を乗り越えていく課題を担うことになる。特に、A男にとって父は厳しく怖い存在であり、この課題は非常に大きな意味を持っていたと思われる。しかし、怖い父を乗り越えていく前に父は急死してしまった。この父の死をいかに受け入れ乗り越えていくかという難題が、A男の心に重くのしかかっていった。A男は、この課題を夢を通してやり抜いていると思われる。頻繁に登場した叱責する怖い父は、A男の成長とともに現れなくなった。その後どのような父が夢の中に登場していったのか、A男が父親を乗り越え受け入れていくプロセスを考える上で、非常に興味深いことと言えよう。

2. 事例2：B子（中2女子）

(1) 主訴 不登校。学校に行きたいが、友だちとの関係がうまくいかない。

(2) 家族構成（Y年度7月段階）

父（会社員 42）

└──────────┘ 本人（中2）

母（主婦 40）

〈父〉 旧家の次男として生まれる。以前、ある会社に勤務していたが、管理職になってから部下の掌握がうまくいかず、結局退職し別の会社に移る。社交性に欠け、人の心を理解するのが苦手。集団より個人での活動を好み、趣味の世界に生きている。子どもを外へ連れ出すこともない。祖母（父の母親）の影響が強く、今でも祖母に頼っている。退職のときも祖母に相談し、反対する妻に対して祖母が父をかばった。B子の不登校も、祖母は父の態度には一切触れず、もっぱら母を責める。なお、実家の祖父は父に似て非社交的な人。しかし祖母はやり手で、実家の家業がうまくいっているのも祖母に負うところが大きい。

〈母〉 サラリーマンの家庭で育つ。B子同様一人っ子でまじめな性格。学生時代の成績はよかった。大学を卒業し会社勤務。見合いで現在の夫と結婚し、専業主婦。夫の実家が地元の名家で優秀な親戚が多く、プレッシャーを感じながら一生懸命子どもを育ててきた。B子が学校に戻ろうとする度に、B子とともに大きく揺れる。自ら「平凡な家庭に育ち、あまり苦労したことがなかった」と言い、B子の不登校に心身ともかなりまいっている様子。

(3) 生育歴・性格

ひとりっ子で大切に育てられる。給食を無理に食べると嘔吐することが、幼稚園の頃からあった（家では普通に食べられる）。小1のとき給食中嘔吐し、その後いじめられ、ときどき休むようになる。また、恐がって夜うなされることもあり、小2のとき自宅はそのままに他の校区にマンションを購入し転校する。転校先ではうまく適応し、友だちもでき明るく元気になる。小5になったとき、元の学校に戻る。

小5の担任が大変厳しい人。4月当初、母が、B子の給食を食べにくい点を担任に伝えたところ、「甘えている」といって叱られる。「一人っ子はダメ」「勉強だけできてもダメ」など辛辣なことを言われる。また、塾通いも批判され、結局塾をやめてしまう。クラスの子どもたちもB子を批判する。体調も悪くなり、頻繁に下痢をするようになる。授業中トイレに行くことからかわれ、つい我慢してしまう。その結果さらに腹痛に襲われるという悪循環に陥る。転校で取り戻した明るさは消え、B子は徐々に暗くなっていく。この頃から同世代とのつきあいが減っていく。小6で担任が替わったものの、クラスのメンバーと雰囲気は変わらず。しかしなんとか学校に通い続け、中学校に進学する。

1年生の時は、友だちもでき登校。しかし、2年生になり新しいクラスで仲良くなった子が、「B子はブリッ子」と言いふらすようになる。また、ある行事の委員になり、張り切って仕事をするが他の委員はやる気がなく、B子一人で頑張り先生からほめられるものの、逆に周りの子どもから嫌われてしまう。このことをきっかけに不登校。両親は小2のときと同じように、再び転校（小2から小4までいた地域の中学）させる。しかし、1日登校したのみで、その後本格的な不登校になってしまう。

性格的には、まじめで硬い印象を与える。本来エネルギーはあり、小学校のときはリーダー的な役割をやるが多かった。しかし現在は、人を求めているものの同世代とのつきあいがうまくいかない。いじめられたり裏切られたりした経験から、同世代の子どもたちへの不信感が強い。

後に実施したY-G性格検査はB型。バウムは樹幹が太くしっかりしているものの、樹冠部が小さく全体のバランスが悪い。また、樹冠部は塗りつぶされており、不安や葛藤の強さがうかがえる。学力は高い。

(4) 来談経路 学校の勧めにより、Y年7月、母とB子の2人で来室。

(5) 援助の過程

○インテーク（Y年7月）

母は、上述したような経過を話す。特に小5の担任への不満が強く、「あのとき我慢せず、担任にはっきり言えばよかった」と後悔の念を語る。

・性急な働きかけは難しい・学校と連携をとりながら対処していく・親子とも、継続的に相談していく・可能ならば、しばらく適応指導教室に通ってみる等、Thの考え方を伝える。

○第1期（Y年7月～Y年12月）

〔適応指導教室での様子〕

7月は、母の面接日に合わせて適応指導教室に2回通室したのみ。バスで来るとき、周囲の目が気になるとのこと。9月再登校めざし、3日ほど学校に登校したが挫折。その後、再び適応指導教室への通室を始め、ほぼ毎日通って来るようになる。学習室で一生懸命勉強する。成績へのこだわりが強く、かなり難しい問題集を解こうとする。勉強に没頭することが、B子を支えている感じ。テストを学校から送ってもらい適応指導教室で受験するようになる。

同級生のP子と話すようになるが、11月頃には離れてしまい、同世代の女子との距離が縮まらない。しかし、話し出すとまわりを考えずにしゃべりまくる面もあり、対人関係そのものを拒否しているわけではない。むしろ、人を求めているが、B子の話しの内容（勉強のことや成績のことが中心）に周囲が辟易することもある。対人関係が進展しない。この頃、適応指導教室の子ども同士で、週末にショッピングに行くことがあったが、誘われてもB子は参加しなかった。適応指導教室に来室する以外は、家にいることが多い。一人で出かけることはない。

月2、3回ある適応指導教室の行事には、参加したりしなかったり。参加しても話す友だちが少なく、みんなと一緒に食事をとることが苦痛で楽しめない。いやいや参加しているようで、行事への参加がプレッシャーになっている様子。

〔母親面接から〕

7月から9月にかけては、不登校の遠因となった小5の担任への不満や、B子を守ってやれなかったことへの

後悔を頻繁に語る。母は「B子をまじめに育てすぎ、今の子どもたちの価値観とあわなくなってしまった」としばしば言う。

B子の中には学校に行かねばという気持ちが強く、再登校を決意する。9月3、4日登校するが、緊張が強く午前で帰ってくる。5日、母が「学校に行ったら」というと、縄跳びを首に巻いて「死ぬ」といってパニックになる。その後、再び適応指導教室へ通室するが行事に参加できないことが多い。

最近、勉強へのこだわりや他人への批判など自己中心的で人間不信に満ちた頑なな考え方をすることが多い。ときどき話していて母の方が嫌になってくると言う。

母は、祖母（夫の母）について詳しく語る。B子が小さい頃から、週末になると祖母が家にやってきた。そのたびに優秀な親戚の話をして、B子にプレッシャーをかける（たとえば、いとは名門高校へ合格したなど）。「B子の勉強へのこだわりは、かなりの面、祖母の影響」と言う。「B子は小学校の高学年頃から祖母が来ることを嫌い、祖母が帰ると泣いていた。しかし、祖母の上昇志向やブランド志向が無意識の内にB子の中に取り入れられている」と語る。「そんな祖母に夫はいいなり。私も嫁として我慢してきた」と言う。しかし、B子の不登校をきっかけに、母は祖母の訪問を拒否する。母とすれば、初めての姑への反抗。それ以来、祖母は来なくなった。

○第2期（Y+1年1月～Y+1年3月）

〔適応指導教室での様子〕

3学期の初日、B子は2学期と同じように学校にチャレンジする。今回も1日行ったのみで続かず。しばらく混乱するが、1月中旬から再び適応指導教室に来るようになり、徐々に落ちつきを取り戻す。同世代の子どもたちとの距離は相変わらず。むしろ、2学期以上に集団に入れない様子で、小学生の子どもたちと一緒にいることが多い。行事への参加も2学期以上に減り、一人で勉強に没頭している。

2月の実力テストを学校で受けたいという。担任にお願いして、教室か相談室のどちらでもテストを受けられる体制をとるが、当日登校できず。3月の期末は適応指導教室で受けるが、数学が思ったほどできなくて落ち込む（実際は大変難しいテストで、B子はよくできた方だった）。また、いところが進学校に合格したときもショックを受け、適応指導教室を休む。学校や成績へのこだわりが相変わらず強い。

〔母親面接から〕

B子は母に「適応指導教室でも友だちがいない。同世代の子たちと一緒にいても楽しいと思えない。勉強しているときが一番楽」と言う。

この時期、学業や登校を巡って何度もB子の心が揺れる。それにあわせて母の心も揺れ体調を崩し、2度ほど面接をキャンセルする。3月の面接で、Thは母の苦悩を受け止めた上で、〈学校へのこだわりの強いB子は同じような混乱を今後も何度か繰り返す可能性のあること、さらに、これらの悪循環を母の方から断ち切ってほしいこと〉などの考えを伝え、母を支持する。

○第3期（Y+1年4月～Y+1年8月）

〔適応指導教室での様子〕

3年生になり登校する気でいたが、結局行けず。しかし、今回の混乱は長引かず、すぐに適応指導教室への通室を再開する。B子は「しばらくは学校へ行くことをあきらめた」と言う。

適応指導教室のメンバーも大幅に変わり、4月から通室するようになった同級生のZ子としゃべるようになる。5月の行事も嫌がらずに参加する。

〔母親面接から〕

担任とうまくいっていると思っていただけに、登校できないことに母がっかりする。しかし、「これで子どもが本当に立ち直るまで、適応指導教室へ通わせる決意ができた」と、今までになくさばさばした感じで話す。「母も子もやっと開き直る気になった」と言う。Thも〈時が熟していなかったと考え、時の熟するのを待ちましょう〉と伝える。

最近、難しい問題集をやめ、教科書中心で勉強するようになった。B子自身、「問題集は追っかけられている感じで、やめてほしかった」と母に言う。少し地に足のついた勉強ができるようになってきた。

5月の行事は抵抗なく参加できた。いつも行事に参加するかどうかでB子は迷っていたが、今回は迷うことなく参加した。母は、「最近、ある文化サークルの読書会に参加するようになった」と語る。母の中にも、冷静に

自分を見つめる余裕が少しずつ生まれてきた様子。

○第4期（Y+1年9月～Y+2年3月）

〔適応指導教室での様子〕

9月のThとの面接で進路の話になり、B子は「まだ、たくさんの友だちとうまくやっていく自信はないから、通信制高校へ行こうと思う。できたら大検も目指したい」と語る。以前のように、勉強に強迫的に打ち込むことはなくなり、ほどほどに勉強したり、親しくなったZ子とおしゃべりしたりして過ごすようになる。しかし、Z子以外の友だちと接することはなく、交友範囲は広がらないまま卒業を迎える。B子の希望通り、通信制高校へ進学する。

〔母親面接から〕

「随分落ち着いてきた。成績は良いのだから全日制高校を受けてほしい気持ちもあるが、やっとここまで精神的に回復し、進学先もB子の意思で決めたのだから応援したいと思う」と母は語る。

(6) 考察

人は、その人自身の生まれもつ気質と、取り巻く環境との相互作用の中で発達していく。幼稚園の頃から、緊張場面で食事を嘔吐するなど神経質で緊張しやすい点は、B子の気質的な特徴といえよう。一方、祖母を中心とする旧家にみられる強い学歴指向や、一人っ子として両親の大きな期待を担い大切に育てられてきた面は、B子の発達に大きな影響を与えた環境的側面であろう。もちろん、これらの2側面は互いに依存・融合し合っており、純粋に分離して取り出せる訳ではない。だが、B子を理解していく上で、このような2分法はひとつの枠組みを与えてくれる。すなわち、B子の神経質で緊張しやすい気質は、強い保護的環境によって増幅される。さらに保護的環境は社会経験の乏しさをもたらし、緊張しやすい気質との相互作用が、結果として幼稚園や小学校低学年での不適応に結びついたのであろう。

小2のとき、転校という手段を取ることによって、不適応を一応乗り越えたかにみえたB子は、小5で元の学校に戻り再び不適応に陥る。その契機は、5年生の担任の対応であった。面接の初期に母親から語られた内容のかなりの部分が、「あのとき我慢せず、担任にはっきり言えばよかった」という自らへの後悔と担任への不満や怒りであった。

ところで、小5で生じたB子の不適応は担任の対応だけでなく、小学校高学年という発達段階に起因する問題とも考えられる。一般に、小学校高学年頃から青年期の前駆的な状態があらわれ、共通な興味や話題を通して仲間意識を高め、同性を中心とする仲間集団を形成していく（保坂，2000）。仲間集団の対人関係は徐々に複雑になり、青年期的な色彩を帯びてくるのである。神経質で緊張が強く、社会経験の乏しいB子にとって、このような対人関係は苦手であった。きまじめで話題が乏しく、ともすると成績のことに話題が集中しがちなB子は、クラスの中でやや異質な存在として、同級生からの批判や嘲笑の対象になったのであろう。何とか持ちこたえたものの、中学2年生で限界を迎え学校に通えなくなってしまう。ついに緊張の糸が切れてしまった。そして、適応指導教室を訪れることになっていく。

適応指導教室に通い始めてからのB子の特徴は、学校復帰への強いこだわりが持続した点である。これは、B子のようなきまじめで学習意欲の高いタイプの子どもたちに、しばしばみられる傾向である。B子は学期が替わるとき、必ず再登校を試みた。そのたびに母親を巻き込み、母子ともに混乱を繰り返した。特に、中学2年9月（第1期）は2日登校したものの、3日目の朝、どうしても登校できないという劣等感や敗北感から自殺をほめかした。このときがB子の学校復帰を巡る混乱のピークであった。また、B子同様、両親の心の中にもB子の学校復帰への強い期待があり、B子の混乱に拍車をかけた。

このようなとき、援助する側にとってもっとも肝要な点は、学校復帰したか否かという現象面に目を奪われることなく、B子や母親の心の動揺や苦悩を理解しゆつたりと受けとめることである。実際、適応指導教室に通いだしたB子は、適応指導教室に通えたという自信と、あるがままが許される適応指導教室の受容的な雰囲気によって、混乱から徐々に立ち直っていった。母親も、B子が適応指導教室に通い始め落ち着いてくるにつれて、徐々にB子やB子を取り巻く状況を冷静に見つめることができるようになっていく。母親との面接の内容も、小学5年時の担任への不満という過去に向かう内容から、B子をどのように自立させていくかという将来に向けた前向きな内容に変化していくのである。B子はその後、中学2年3学期、中学3年1学期、それぞれ学期の変わり目に学校復帰の試みを繰り返し混乱するが、その心の動揺は回を重ねるたびに小さくなっていく。中学3年以降は

劣等感や敗北感に苛まれることなく、新学期を迎えられるようになる。

その結果、対人関係も改善していった。すなわち、それまでの学習に没頭することで孤立から生じる苦悩や傷つきを抑圧する悪循環が、学習へのこだわりが弱まることで断ち切れ、対人関係に向かっていく意欲が生まれたと思われる。そのとき、運良くZ子との出会いがあり、B子の対人関係は大きく改善していった。適応指導教室での実際の対人関係が、B子の心の成長を促進したのである。

Ⅲ. 2事例から見た適応指導教室の意義—居場所づくりの条件—

1. 「安全（安心）」と「自由」の保証

不登校の子どもたちの中核的問題は学校に行く行かないこと以上に、登校しないことによって、結果的に彼らの成長や自立を促進する場が失われることである。A男やB子の場合も、学校という場から離脱することで、成長や自立を支える場が失われている。もちろん、家庭が彼らを支える場となっている面もあるが、家族のみで彼らを援助していくことはかなり困難である。例えば、A男の家族は、父の死によって家族成員一人ひとりと家族システム全体の混乱が生じていた。また、B子の場合は母との強い情緒的な絆がB子を支えていたのであるが、B子の不安や混乱で母も強く揺れ動いてしまい、B子の成長を保証していくのは難しい状況であった。

そこで、家庭以外の場である適応指導教室に通室できるようになること自体が、重要な意味を持つ。そのために、適応指導教室に課せられた第1の条件は、不登校の子どもたちが、通室しようという意欲を喚起する場を作ることである。具体的な条件として、通室する子どもたちの「安全（安心）」と「自由」を保証することである。それが、もっとも重要でかつ基本的な場づくりの条件となる。

なぜなら、A男やB子のように、一般に不登校の子どもたちは、周囲との対人関係に傷つき、不信や不安を心の奥底に抱いている場合が多い。傷ついている彼らは、自分の気持ちが尊重されているという実感を持たないかぎり新たな場に参加しようとはしない。学校で味わった苦悩を再び経験することを避けようとするのは当然と言える。

従って、適応指導教室という場に「安全」と「自由」を実感したとき、はじめて心を開き通室への意欲を高めるのである。A男もB子も、「安全」や「自由」をある程度実感したからこそ、恐る恐るではあるが通室を開始した。もし彼ら自身の意思や希望を軽視した対応をしていれば、彼らは適応指導教室に足を運ばなかったであろう。「安全」と「自由」を実感できる受容的な場を作ることが、居場所づくりの第1の条件となるのである。

2. 「個別援助」の重視

第2の居場所づくりの条件は、「個別援助」を重視することである。適応指導教室では不登校によって孤立しがちな子どもたちの集団化を企図しながらも、援助の対象をあくまで個人に置く必要がある。

例えば、A男とは適応指導教室のスタッフが一緒にワープロやゲームをしたり、受験が近づいてからは勉強を教えたりして、活動を共有する形での個別的な関わりを頻繁に持ってきた。また、ThがA男の気持ちや考えに耳を傾けるなど、言語レベルでの関わりもしばしば行った（しかし、A男のもっとも深い心の傷である父の死に関しては、A男の夢を傾聴すること以上に踏み込まず解釈や分析を差し控えた）。また、B子の場合、対人関係を避け学習に没頭する気持ちを尊重し、B子の内面に踏み込むことをせず学習の援助や短時間の雑談を中心に対応した。このような個別的な援助が、彼らが同世代の集団に参加していくきっかけを作りだし、ひいては成長や自立への道を切り開いていく支えとなっていった。

また、集団活動に参加した後も丁寧な「個別援助」を継続していく必要がある。なぜなら、B子の場合に顕著に見られたように、適応指導教室での対人関係でも、学校場面と同様の葛藤や不安をしばしば経験するからである。このとき彼らを個別的に支えていくことは、きわめて大きな意義を持つ。なぜなら、彼らは学校場面では得られなかったサポートを受けることによって、かつて学校で失敗した葛藤や不安を、この新たな場で克服していく可能性を実感するからである。そして、首尾よくこの対人葛藤を乗り越えたとき、彼らは学校で失った自信を取り戻すことになる。この自信こそが、不登校を乗り越えていくことの心理的な成果を示しているのである。

B子が対人関係の度重なる挫折を乗り越えて、Z子との関係を築いていったのは、ThやスタッフによるB子への援助が存在したからであろう。もし、このような「個別援助」に支えられていなければ、B子の度重なる挫折はB子を打ちのめし、より重篤な問題を引き起こしたかもしれない。

3. 子どもの「自己決定」の尊重

第3の居場所づくりのための条件は、子どもたちの「自己決定」を尊重することである。子どもたちの話に耳を傾けるとは、見方を変えるならば、子どもたち自身の「自己決定」を促すことを意味している。

適応指導教室では通室の時間に始まって、活動内容、行事への参加など大半をスタッフと相談の上、子ども自身に決定してもらうことは大切なことである。スタッフにできることは子どもへの押しつけや強制ではなく、子どもの話に耳を傾けることなのである。

A男は、適応指導教室への通室を始め、その後の活動の大半を自らの考えで決めてきた。新聞配達、空手、受験校の選択など重要な決定は、周囲のアドバイスを参考にしつつも、最終的にA男自身の意志で決定してきた。B子の場合も同様である。

もちろん、これらの決定の中には中断したり継続できなかったものもある。A男の空手やB子の集団参加や学校復帰の試みは、その代表的なものであろう。

しかしながら、実際に子どもたちの「自己決定」が守られるかどうかは、それほど大きな問題ではない。むしろ、自分の問題に対して他者のアドバイスを参考にしながらも最終的には自分で決めることが大切なのだという人生に対する基本的な姿勢や態度を実感してもらうこと、さらに、自らで決定したことがうまく遂行できなくてもやり直しが許されることを学ぶことが極めて肝要なのである。このような姿勢や態度を体感することこそ、子どもたちが不登校を克服し自立の道を歩んで行くのに不可欠なことと言えよう。

4. 「試行錯誤」の承認

上で述べたやり直しが許されること、換言すれば「試行錯誤」が認められることが、「自己決定」の尊重から引き出される居場所づくりのための第4の条件なのである。

A男もB子も、適応指導教室での活動や対人関係の中で「試行錯誤」を繰り返してきた。とりわけB子は、二歩進んでは一歩戻るという一進一退を繰り返してきた。何度も再登校にチャレンジしそのたびに挫折したり、適応指導教室の同世代の友だちとうまくいかず学習室で勉強に没頭したりしてきた。そのたびに傷つきや落ち込みを経験しながら、彼女なりに心の作業を行ってきた。そして徐々に自分を受け入れるようになり、気負いや力みが抜け、Z子という友人と出会うことができた。B子の「試行錯誤」が、B子自身の成長に結びついたと言えよう。

もちろん、このとき第2の条件であるThやスタッフによるB子への「個別援助」が存在したことが、B子の成長を促進したことは疑いのない事実である。B子の場合、B子が苦悩をThやスタッフに直接語ることがそれほどなかった。むしろ、彼女の「苦悩に言及することなく、B子を守る場であることを彼女自身が実感できるように振る舞うことがThやスタッフの役割であった。換言すれば、B子を「抱える環境」(神田橋, 1990)を作ることが重要な意味を持っていた。その結果、B子の試行錯誤は自己否定に帰結することなく、自らを受け入れる方向へと変化していったのであろう。

5. 「自発的な子ども集団」の形成

第5の条件は、「自発的な子ども集団」を創造していくことである。第4の条件の「試行錯誤」がもっとも具体的な形で表現される場が、「自発的に生まれる子ども集団」である。

当然のことであるが、適応指導教室への通室者が増えるにつれ子どもたちは徐々に集団を形成していく。ここで創られる集団はThやスタッフが意図的に作ったものではなく、子どもたちが仲間との出会いを通して自発的に形成したものである。そこでは学校での集団同様、様々な感情が引き起こされる。新しく知り合った友と楽しい時を過ごす、恋愛に似た淡い思いが生まれるなどのプラスの感情だけではない。喧嘩して涙を流したり、傷つけあったりというマイナスの感情も生まれてくる。まさに喜怒哀楽の感情を体験していく。集団の中でこのような感情を体験してもらうこと自体が、適応指導教室の大きなねらいなのである。なぜなら、適応指導教室に通う子どもたちは学校の集団でこのような感情に翻弄され、その結果として不登校に陥ったケースが多いからである。適応指導教室という「安全」と「自由」が確保され悩みを相談できる人のいる場で、対人関係の楽しさと厳しさを再び経験することが、子どもたちの成長や自立に大きな意味を与えるのである。

「自発的な子ども集団」の中で、子どもたちは様々な側面を表出する。子ども集団が形成されるにつれて、1対1のカウンセリングでは気づかない子どもたちの一面がはっきりと現れてくる。大人に気を遣う子が同世代に対して攻撃的であったり、無愛想な子が小さな子どもたちに優しくかったりと、ときとして意外な一面をみせるこ

とがある。このような面は、多くの場合、実は子ども一人一人が、今までに無意識的に遂行してきた学校や家庭での対人関係パターンなのである。それが適応指導教室という場を借りて再現されたのである。適応指導教室という「安全」で「自由」な場は子どもたちの心理的退行を促進しやすく、子ども一人一人が無意識のうちに築き上げてきた対人関係の基本的なパターンが再現されやすいのである。

例えば、A男は「子ども集団」の中で、とても友だちに気をつかっていた。これは家庭で父親に気をつかい叱られないように努力してきた今までの対人関係のあり方が、友人関係の中で表現されたものとみなすことができる。また、B子は初期の頃、周囲の子どもたちの気持ちに気づかず、勉強を中心とした自らの関心事ばかりを語り、周囲を辟易とさせることが見られた。これはB子が幼児期から築き上げてきた対人関係の不安に対する過剰な防衛と見ることができる。この防衛が結果的にB子の対人関係を一層困難なものにしていた。A男もB子も、Thやスタッフとの関わりの中では、それほど具体的に表現されなかった対人関係の弱点を、適応指導教室の友人関係の中で再現していったと言える。

適応指導教室に通う多くの子どもたちにとって、対人関係のパターンを再現することは極めて意味があることなのである。なぜならば、対人関係の再現によって引き起こされる様々な感情を共有してくれるThやスタッフが適応指導教室にいるからである。子どもたちはThやスタッフをみつけては相談に乗ってもらうようになっていく。このような行為の積み重ねが、自然な形で対人関係パターンの改善や受容につながっていく。ある意味で適応指導教室は対人関係の実験室なのである。

引用文献

- 保坂亨（2000） 学校を欠席する子どもたち 東京大学出版会 219-238
- 本間友巳・中川美保子（1997） 不登校児童生徒の予後とその規定要因 ― 適応指導教室通室者のフォローアップ ― カウンセリング研究 第30巻2号 142-150
- 神田橋條治（1990） 精神療法面接のコツ 岩崎学術出版 27-42
- 下山寿子・須々木真紀子（1999） 適応指導教室における相談活動 ― 通級生徒の在籍校とのかかわりと特徴から ― カウンセリング研究 第32巻2号 163-172
- 総務庁行政監察局（1999） いじめ・不登校問題などの現状と課題 大蔵省印刷局 32-41
- 総務庁青少年対策部（2000） 平成11年度版青少年白書 大蔵省印刷局 223